■トラック１

【ルーテシア】
「今、手は空いてらっしゃるかしら？」

【ルーテシア】
「ええ、ここに来るのは初めてよ。はぁ……見て分からないの？　ここはいちいち説明しないと、何もしてくれない治療院なのかしら？」

【ルーテシア】
「……ふぅん、そう。患者が自分の怪我の状態をどれだけ把握しているか確認したいわけね。まぁ、意味があるのならいいわ」

【ルーテシア】
「ところで、ヒーラーは貴方だけなの？　大きな治療院だと思ったのだけど……」

【ルーテシア】
「他の人は巡回中なのね。ああ、別に、女性のヒーラーがいいとか、そういう意味があるんじゃないわ」

【ルーテシア】
「どうせ、誰が相手でも私は……」

【ルーテシア】
「……何でもないわ。治療をお願いします」

【ルーテシア】
「私の名前はルーテシア。怪我をした場所は左腕と足、それから背中ね。今は一時的に止血魔法をかけているけど、魔法が切れたら倒れると思うわ」

【ルーテシア】
「怪我をした理由は……ダンジョンで大型の魔物との戦いになったからよ。私、こう見えても剣士なの。賞金を稼ぐためにダンジョンにはよく行くのよ」

【ルーテシア】
「でも今日の敵は思ったより強くて……それで、こうして怪我をしてしまったの。たまたま近くにいた白魔法使いの人が、止血魔法をかけてくれたから良かったんだけど」

【ルーテシア】
「……と、とにかく。私の怪我は魔物と戦って出来たものよ。他に何か言わなくてはいけない事があるかしら？」

【ルーテシア】
「……ええ、入院になっても問題ないわ。怪我に合わせてそちらで判断してもらえる？」

【ルーテシア】
「分かりました。お金に糸目は付けませんから、最適な治療をしてちょうだい」

【ルーテシア】
「……ああ、そうでした。聞くのを忘れていたわ。貴方、名前はなんて？」

【ルーテシア】
「……ふぅん。では、改めてよろしくお願いします」

■トラック２

【ルーテシア】
「ん……もう、朝……」

【ルーテシア】
「……そうよ、私……昨晩からこの治療院に入院して……」

【ルーテシア】
「昨日は一通り検査をしてもらったけど、怪我の具合は──痛ッ！　っつ……魔法が解けたから、血が……」

【ルーテシア】

「魔法でなんとかなっていたけれど、魔物の攻撃をかわした時に足をざっくり切ってしまったから……っ、このままじゃ普通に歩くにも時間がかかりそうね……」

【ルーテシア】
「はあ……早く治ればいいのだけれど……」

【ルーテシア】
「は、入ってもいいわよ！」

【ルーテシア】
「お……おはよう。今日も検査かしら？」

【ルーテシア】
「今日から本格的な治療に移る？　そう……なら、お願いするわね」

【ルーテシア】
「まずは触診なのね。ええ、触っても平気……っ、痛……！」

【ルーテシア】
「……気にしないで。少し痛んだだけだから。それに、痛みを治すのが治療でしょう？　私の事を思うなら、早く手を動かしなさい」

【ルーテシア】

「（……まずは触診。傷口をゆっくり診ていくのね。包帯を解いて、患部の確認……へえ。昨日はあまり気にしていなかったけど、すごく丁寧に触っているのね）」

【ルーテシア】
「ん……いえ、そこは別に痛くないわね。もっと、下の方……っつ！　ん……そこは、少し……」

【ルーテシア】
「痛み止め……そうね、あるならいただける？　この調子じゃ、リハビリに入るにも集中出来なさそうだもの」

【ルーテシア】
「（次に消毒。てっきり魔法で全て終わらせてしまうのかと思ったけれど、ここの治療院は魔法はあまり使わない主義なのね）」

【ルーテシア】
「（近くにあったし、前に行った治療院は行きづらかったしでここを選んでみたけれど……案外、悪くないかも）」

【ルーテシア】
「っひぅ……！　……な、なんでもないわよ！　消毒液がしみただけ。続けて！」

【ルーテシア】

「っ……ん、んっ……うっ……んん、んっ……」

【ルーテシア】
「（消毒液が傷口に触れるだけで、すごくしみる……でも、治療だもの。我慢しないと）」

【ルーテシア】
「（消毒を終えたら化膿止めを塗って……昨日と同じだけど、これは見た事のない薬だから、多分この治療院で精製しているものね）」

【ルーテシア】
「（スーッとして、なんだか気持ちいい……いつも旅に出る時は市販の薬を使っているのだけど、この薬があったら楽にならないかしら）」

【ルーテシア】
「……ねえ、聞いてもいい？」

【ルーテシア】
「その薬、売っていたりはしないの？　昨日塗ってもらった後も、すごく効く感じがして……旅に出る時に持っていけたらと思ったのだけど」

【ルーテシア】
「え、そうなの？」

【ルーテシア】
「なるほど…患者の傷の具合に合わせて調合してるのね…　そ、それってすごく手間がかかるわよね？」

【ルーテシア】
「……患者のため、だから？　……ふ、ふぅん……そうなの。わ、悪かったわね、変な事を聞いてしまって」

【ルーテシア】
「（薬の調合がどれだけ難しいかは、専門じゃない私でも知ってる。だからこそ、道具屋で売っているのは汎用性の高い薬だし……）」

【ルーテシア】
「（同じ切り傷でも、魔物の種類によっては全然違う効能が必要になる事もあるって聞いた事があるわ。それなのに、調合するなんて……）」

【ルーテシア】
「（前に行った治療院とは違う……ここは、本当に患者の事を考えているのね……）」

【ルーテシア】
「……」

【ルーテシア】
「……え？　あ、ああ……別に何でもないわ、少し考え事

をしていただけよ。それより、次は何をするのかしら？」

【ルーテシア】
「包帯を巻くのね。足を上げて……ええと、こんな感じでいいかしら？」

【ルーテシア】
「ん……」

【ルーテシア】
「（包帯を巻くのもすごく手慣れている。治療院の人だから、当然といえば当然なんだけど……私がさっき痛いって言ったところに力をかけないように、丁寧に巻いてる……）」

【ルーテシア】
「（そういう細かいところも、患者のためを思っているのかしら……）」

【ルーテシア】
「あ……あ、ありがとう。足はこれで終わりかしら？」

【ルーテシア】
「へぇ、最後に癒しの呪文を……てっきり、ここは魔法を使った治療はしないのかと思っていたわ」

【ルーテシア】
「治癒魔法の特性？　え、ええ……知識としては知っているけれど……確か、傷を塞いだり、活性を促したりするものよね？」

【ルーテシア】
「でも、傷を一瞬で治すような魔法は高度なヒーラーにしか扱えない。昨日ダンジョンで私を治療してくれた人も、血を止める事しか出来なかったわ」

【ルーテシア】
「治療院が各地にあるのも、治癒魔法は攻撃魔法よりも習得が難しいから……」

【ルーテシア】
「……当然よ。私は冒険者なのだから、一緒に戦う事になるかもしれない人の事くらい、事前にきちんと調べたわ」

【ルーテシア】
「で？　治癒魔法の特性と治療に何の関係があるの？　これもまた、仕組みを知らないといけないみたいなもの？」

【ルーテシア】
「……魔法を頼りにしないように？　おかしな事を言うのね……貴方、ヒーラーでしょう？　高度な治癒魔法が

あればそれに越した事はないじゃない」

【ルーテシア】
「……た、確かに、怪我をしても治してもらえばいい、という考えは危険かもしれないけど……」

【ルーテシア】
「私自身の治癒力を高める事で、次の怪我を防ぐ……ふぅん。なんだか、変な話ね。貴方たち治療院からすれば、怪我をしなくなったら商売上がったり、になるのではなくて？」

【ルーテシア】
「……怪我をする人が少ない方がいいって……とんだお人好しね」

【ルーテシア】
「（……私は、そんな風に考える事なんて出来ない……）」

【ルーテシア】
「まあいいわ。ここに入院した身だもの、貴方の治療方針に任せます。その代わり、最初にも言ったけど完璧に治してよね！」

【ルーテシア】
「っ……！」

【ルーテシア】
「（力が流れ込んでくるような感じがする……ただ治されているのとは違う）」

【ルーテシア】
「暖かい……」

【ルーテシア】
「……っ！　な、何でもないわ……」

【ルーテシア】
「これで治癒力が高まっていくのね？　目に見えては変わらないでしょうけど……でも、今の、悪くはなかったわ」

【ルーテシア】
「ん……次は背中？　えっと……脱げばいいのかしら？」

【ルーテシア】
「ああ、入院着（にゅういんぎ）は脱がなくても治療が出来るようになっているのね。分かったわ。じゃあ、お願い」

【ルーテシア】
「ええと……うつ伏せになって、背中をめくって……」

【ルーテシア】
「これでいいかしら？　そう、じゃあよろしく」

【ルーテシア】
「……ひゃっ！？　つ、つめたっ……！」

【ルーテシア】
「……ご、ごめんなさい。いきなり冷たくなったから、少し驚いただけよ。ほら、続けて」

【ルーテシア】
「（びっくりした……濡れタオルで背中を拭いてくれたのね……）」

【ルーテシア】
「んっ、ん、んんっ……んっ……ふぅ……ん、ぅ……」

【ルーテシア】
「（背中をゴシゴシしてもらうのって、こんなに気持ちいいのね……自分で洗う時は、力を入れにくい場所だったから……）」

【ルーテシア】
「（あ……傷口のところ、優しく拭いてくれてる……こっちも丁寧なのね……なんだか、新鮮な感じがする……）」

【ルーテシア】

「（ヒーラーが傷を治すだけじゃない……これから旅に戻る冒険者の事も色々と考えた治療……ここに来て、良かったかも……）」

【ルーテシア】
「（……私はこの人みたいに、誰かにこんなに丁寧に接する事が出来ない。ずっと、ずっとそうだった……）」

【ルーテシア】
「……っ、ん、ぅ……ふっ……んんっ、んっ……」

【ルーテシア】
「（でも……どうしてかしら。ここでなら、強がらなくてもいいような気がする……）」

【ルーテシア】
「っ……は、あっ……んっ、んっ……んん……」

【ルーテシア】
「……終わり、かしら？　ありがとう……」

【ルーテシア】
「分かってるわよ、さっきと同じように薬を塗って、癒しの呪文でしょう？」

【ルーテシア】
「文句なんてないわ。……だから、よろしくね」

■トラック３

【ルーテシア】
「ふぅ……さっき倒した魔物の素材、意外といい値が付いたわね」

【ルーテシア】
「昔の私なら、あんな魔物１人で倒せなかったと思うけど……退院してからすごく動きやすくなったからかしら？　ふふっ、いい傾向ね」

【ルーテシア】
「にしても……流石にずっとダンジョンに潜っていたから、身体が凝り固まってる気がするわね……」

【ルーテシア】
「そうだ。報酬も貰ったし、マッサージをしてもらおうかしら？　確かあの治療院は、怪我以外にもメンテナンスをしてくれたはずだし……」

【ルーテシア】
「……べ、別に、あの人に会いたいわけじゃないけど！」

【ルーテシア】
「お邪魔するわよ。今、いいかしら？」

【ルーテシア】
「ああ、良かった。いえ、今日は怪我ではないの。魔物の討伐に行っていたんだけど、身体が凝ってしまって……マッサージの方をお願い出来るかしら？」

【ルーテシア】
「あ……えっと、そうね。せっかく貴方がいるんだし、貴方にやってもらいたいかも……も、もちろん、他の人の治療があるなら構わないけどっ！」

【ルーテシア】
「……そ、そう。手が空いているのね。じゃあ……お願い」

【ルーテシア】
「待たせてごめんなさい。着替え、終わったわよ」

【ルーテシア】
「へえ……ここが処置室？　入院した時に使っていた部屋とは違う雰囲気ね」

【ルーテシア】
「ベッドごとにカーテンで仕切られていて……なんだか

いい香りもするわ。これは……アロマ？」

【ルーテシア】
「リラックスする香りなのね……ふふ、これも『患者のため』なのかしら？　ああ、厭味じゃないわよ。入院して、よく分かったの」

【ルーテシア】
「貴方たちが誰よりも私たち患者を思ってくれているって事。だから私は、またここを訪れたのよ。身体を任せるなら、貴方がいいと思ったから」

【ルーテシア】
「でも不思議ね。貴方みたいに実力のあるヒーラーなら、冒険ギルドで引く手数多でしょうに……ヒーラーって、すごく給料も弾むそうじゃない？」

【ルーテシア】
「そうなろうとは思わなかったの？　あ……え、ええと、貴方の今の仕事を否定しているわけじゃ、なくて、えっと……！」

【ルーテシア】
「ごめんなさい、込み入った事を聞こうとしてしまったわね！　雑談はこれくらいにして、マッサージをお願い」

【ルーテシア】
「服はこんな感じで平気かしら？　……ええ、分かったわ」

【ルーテシア】
「あ……アロマの匂いは、ベッドの下からしていたのね。こうして寝転ぶと、すごく香ってきて……」

【ルーテシア】
「（リラックス出来る……もしかして、これも人によって違う香りにしていたりするのかしら？）」

【ルーテシア】
「マッサージは……そうね、全身をお願い出来るかしら？　１番疲れているのは肩と腕ね。剣を使うから、どうしても凝ってしまって」

【ルーテシア】
「ええ、後は貴方に任せます」

【ルーテシア】
「それは何？　……へえ、薬草が入ったオイル……それも貴方が調合したものなの？」

【ルーテシア】
「凝りを解す効果があるのね……ふふ、楽しみだわ」

【ルーテシア】
「ん、っ……！」

【ルーテシア】
「（オイルは思ったより冷たくないけど……怪我をしていた時のマッサージと違って、力が強くて……）」

【ルーテシア】
「っあ……！　んっ、んんっ……！」

【ルーテシア】
「ふ、ぅっ……んっ、ん……はあっ、あっ……！」

【ルーテシア】
「（こ、声が思わず漏れてしまうわね……！？　ど、どうしよう、こんな声……なんだか、恥ずかしい……！　頑張って我慢しないと……！）」

【ルーテシア】
「っ……っ、ん……っ、ふ……！　んっ、ん……んんっ……！」

【ルーテシア】
「（我慢、我慢……！）」

【ルーテシア】
「（まだマッサージは始まったばかりなんだから、これくらい耐えないと……！）」

【ルーテシア】
「（にしても……今までも簡単なマッサージはしてもらった事があったけど、こういう本格的なものは初めてだわ）」

【ルーテシア】
「（入院していた時とは違って、体重をかけてしっかりと凝りを解してくれるような感じ……体が軽くなっていくわ）」

【ルーテシア】
「んんっ……っ、は……ふぅっ……んっ、ん、んんっ……はあっ……」

【ルーテシア】
「っ、あ……ふーっ、ふーっ……んんっ……ん、ん……」

【ルーテシア】
「（怪我をしていた時のマッサージは、治癒魔法をかけながらだったから暖かい感じがしたけど……今日のこれは、オイルのせいかしら。冷たさがある……）」

【ルーテシア】
「（でも、それがいい感じね……少しひんやりしたオイルが、手で伸ばされていくようで……自分で揉んでも得られない感覚だわ……）」

【ルーテシア】
「っ……んん、んんっ……あ、足の、裏……？　ええ、痛くはないけど……もう少し強く？　……そ、そうね。お願いしようかしら……」

【ルーテシア】
「っ……んんっ！？」

【ルーテシア】
「あっ……ご、ごめんなさい。痛かった、と言うわけではなくて、その……びっくりしてしまって……」

【ルーテシア】
「そんなに気持ち良かったか、って……ッ違うわよ！　びっくりしただけ！　き、気持ち良くなんてなってないんだからねっ！！」

【ルーテシア】
「と、とにかくっ！　痛くはないから、強さは今ので大丈夫よ。続きをお願い出来るかしら！」

【ルーテシア】
「んっ、ん……！　んぅ、うっ……はあっ、はあっ……んっ、んんっ……！」

【ルーテシア】

「はあっ……ん、んっ……へ、へえ……足の裏に、そんなに……っ、たくさん、ツボがある、のね……」

【ルーテシア】
「なんとなく、っ、聞いた事くらいは、あったけど……っん、んっ……！　どこに、何のツボがあるか、までは……っ、知らない、わ……」

【ルーテシア】
「っ……！　そ、そこが……肩こりに効くツボ、なのね……わ、分かった、わ……今度、自分でも、押してみるわね……っ！」

【ルーテシア】
「んっ、んっ、んぅっ……はあっ……んっ、んっ……！」

【ルーテシア】
「（ツボを的確に押してもらっているから、かしら……どんどん、気持ち良くなってきてる気が……って、違うっ！　気持ち良くなんて──）」

【ルーテシア】
「っあ……！　あっ、あ……！　んっ、んん～っ……！　うぅ……！」

【ルーテシア】
「（嘘っ……気持ち、いいっ……ダメ、これっ……すごく、

ふわふわするっ……）」

【ルーテシア】
「（オイルが広がって、ひんやりして気持ち良くて……そこを、更に強く押してもらうと……っ、思わず、声が漏れて……！）」

【ルーテシア】
「っふ、ふ……ぅ、うっ……！　んっ、んんっ……！」

【ルーテシア】
「はあっ……あ、次は……太もも？　ええ……大丈夫、よ。お願いします……」

【ルーテシア】
「んっ、んっ……んっ、んん……！」

【ルーテシア】
「あ……怪我を、していたところ……ええ、もう痛く、んっ、ないわ……貴方が、しっかり治療してくれた、おかげで……っ、んんっ……」

【ルーテシア】
「ええ……ここに来る前より動きも良くなって……っ、んん……！　貴方の言う通り、ただ治すより、良かった気がするわ……っ」

【ルーテシア】
「んっ、んっ……んん……はあっ、はあっ……んー……んっ、んん……」

【ルーテシア】
「（足がむくんでいたから、こうやって解してもらえてすごくいいけど……でも、やっぱり、くすぐったいわ……！）」

【ルーテシア】
「（怪我の治療をしていた時とは触り方が違うし、それに、オイルのせいでくすぐったくて……お、お尻の方も、オイルで濡れて、変な感じ……）」

【ルーテシア】
「（とは言え、流石に慣れてきたから……このままなら、耐えられるはず……！）」

【ルーテシア】
「ふーっ……ふーっ、ふーっ……んっ、ん……ふーっ……ふーーーーっ……」

【ルーテシア】
「はあっ……ふう、ふうっ……んっ、ん……んっ……ひゃうっ！？」

【ルーテシア】

「あ、ご、ごめんなさい……！　く、くすぐったくて、ふふ……！　思わず、声が……ふふっ、ふふふふっ……！」

【ルーテシア】
「あ、足の付け根が弱い、なんて、ふふっ……！　今まで、知らなかったわ……！　ふふっ、ふふ、ふふふっ……はあっ、はあっ……」

【ルーテシア】
「う、ぅ〜……ごめんなさい、真剣にしてもらってたのに……ふふっ。続き、お願いするわね」

【ルーテシア】
「んっ……ふ、ふふっ……ふぁ、んっ……ぅ、ううっ、んっ……はあっ、んっ……んっ、んっ……！」

【ルーテシア】
「ふふっ……んっ、ん、はあっ……んっ、ん……ふぅっ、ふうっ……」

【ルーテシア】
「……ありがとう。身体が嘘みたいに軽くなったわ。貴方、マッサージも上手なのね」

【ルーテシア】
「っ……！　そ、そうよ！　気持ち良かったわよっ！！」

【ルーテシア】
「こんな風に全身を揉んでもらうのは初めてだったし、それに、オイルだっていい感じがして……し、仕方ないじゃないっ！」

【ルーテシア】
「ところで、オイルはひんやりしていて良かったけど、それだけじゃないんでしょう？　全身に染み込むような感じがしたの……」

【ルーテシア】
「ふふっ、やっぱり。貴方、本当に患者の事をよく考えてくれているのね。お陰で、明日からまたダンジョンに潜れそうよ」

【ルーテシア】
「……どうして冒険者をしているのか、って？」

【ルーテシア】
「……」

【ルーテシア】
「別に……深い理由はないわ。それより、今日は本当にありがとう。また貴方にマッサージをお願いしてもいいかしら？」

【ルーテシア】
「ええ。もう、貴方以外考えられないもの。はい、これ今日のお代。またよろしく頼むわね！」

【ルーテシア】
「……冒険者をする理由……貴方になら話しても良かったかもしれない。でも……」

【ルーテシア】
「……でも、私には……まだ……その勇気が、ないのよ……」

■トラック４

【ルーテシア】
「……久し振りね。貴方がいて良かった……って、あ……ごめんなさい。雨の中を来たから、濡れてしまっていて……」

【ルーテシア】
「……いえ、今日は、その……怪我をしたわけじゃないわ。でも……」

//少し迷うように
【ルーテシア】
「……」

【ルーテシア】
「……怪我の治療だけでなくて、その……心のケアもしてくれると、前に聞いたから。今日は……」

【ルーテシア】
「……そちらを、お願いしたくて。貴方に……」

【ルーテシア】
「いい……かしら？」

【ルーテシア】
「……ありがとう。でも、私こういうの、初めてで……だから、上手く出来なかったら、ごめんなさい」

【ルーテシア】
「ふふ……貴方は本当に優しいのね。そんな貴方だから、話してみようかと思ったの。ええ、処置室の方ね。よろしく」

【ルーテシア】
「てっきり向かい合ってお話をするのかと思ってたわ。……へえ、正面に座ると圧迫感があって話しにくくなる……確かに、そうかも」

【ルーテシア】
「……こうして隣に座ってもらえる方が、私も気楽に話せ

る気がするもの」

【ルーテシア】
「まずは……どこから話せばいいかしら。……迷っている事、から？　ええ、分かったわ」

【ルーテシア】
「貴方も薄々分かっていたとは思うのだけど……私、その、人と上手く話す事が出来なくて。最初の頃とか、酷かったでしょう？」

【ルーテシア】
「つい強気になってしまって……それで、不快な思いをさせてしまっていた」

【ルーテシア】
「ダンジョンに向かう時も、普通はパーティーを組むものだけど……私はいつも、パーティーメンバーと仲良くなれなくて……それで、しょっちゅう解散してしまったの」

【ルーテシア】
「もちろん、パーティーメンバーの事を嫌っていたわけじゃないわ。一緒に戦いたいと思っていた。でも、どうしても……仲を深める事が難しかった……」

【ルーテシア】
「……どうしてか、って？　そうね……私、生まれ育った

家が貴族なんだけど……」

【ルーテシア】
「ふふっ、驚いた？　そうよね、貴族の娘が冒険者なんて……普通は有り得ない」

【ルーテシア】
「でも、私には優秀な姉が２人いてね。だから、親も親戚も私には見向きもしなかったの。私は所詮、お姉様たちには敵わないから……」

【ルーテシア】
「アリシア姉様は聡明な人。要領が良くて、領土の管理をしているの。何をやってもそつなくこなして、領民からの信頼も厚い」

【ルーテシア】
「クローディア姉様はとにかく優しい人。その優しさに惹かれて、多くの人が集まってくるわ。だから、他の家との交流も盛んで、色々な情報を得る事が出来る」

【ルーテシア】
「でも、私はお姉様たちと違って、何も取り柄がなかったわ」

【ルーテシア】
「剣の腕？　……こんなの、大した事じゃないわ。私よ

り強い人なんていっぱいいる。そりゃ、お姉様たちと戦ったら私が勝つかもしれないけど……」

【ルーテシア】
「そもそも私たちのような貴族の女は戦う事なんてないわ。逆にお淑（しと）やかじゃないって怒られてしまうくらい」

【ルーテシア】
「最初のうちはお父様もお母様も、私に色々と学ばせようとしていたのだけど……何をやっても、お姉様たちみたいに上手くいかなくて」

【ルーテシア】
「元々人と喋るのは得意じゃなかったから、パーティーに行っても誰とも喋れなかった。事務作業だって、私がやるよりお姉様がやる方が早く終わった」

【ルーテシア】
「頑張ってみても……ダメなの。私が全力を出して頑張ってもお姉様たちの足元にも及ばない。かと言って、お姉様たちのように突出した何かが別にあるわけでもない」

【ルーテシア】
「そのうち、お父様たちは私を気にも留めなくなったわ。だから私が冒険者になると家を出ても、反対なんてしてくれなくて……」

【ルーテシア】
「誰も私を愛してくれなかった……その反動で、私は誰かに必要とされたいと思ってしまった。姉たちのように、私にしか出来ない事を見つけたいと……」

【ルーテシア】
「そう思って、剣士としてパーティーに加わった。でも、この人たちは仕方なく私と組んでるんじゃないか、私なんていなくても戦えるんじゃないか、なんて……」

【ルーテシア】
「……そんな事を考えたら、いつも上手く戦えなくなってしまう。当然だけどそんな私を誰も愛してくれるわけがない。だから……私、ソロになったのよ」

【ルーテシア】
「ソロなら、誰に迷惑をかける事もない……それに魔物を討伐出来れば、少なくとも自分はそれくらいは出来る人間なんだと思えるから……」

【ルーテシア】
「……でも、怪我をしても治してもらえないし、連携して戦う事も難しい。それに、仲の良さそうなパーティーを見かけると、余計に虚しくなって……」

【ルーテシア】

「……っ、私、どうすれば……ああいう風に、なれるんだろう、って……！」

【ルーテシア】
「ぐすっ……う……ご、ごめんなさい……こんな事言われても、こ、困るわよね……上手く話せなくて、私──きゃっ！？」

【ルーテシア】
「あ……」

【ルーテシア】
「（抱き締められて……体温が、伝わってくる……）」

【ルーテシア】
「っ……慰めて、くれるのかしら……？　でも、悪いのはいつだって私で……」

【ルーテシア】
「私に才能があれば、姉様たちを羨む事なんてなかった。今まで組んできたパーティーの人たちにを不快にさせる事だってなかったはずで……

【ルーテシア】
「だから、私が、直さないと……！」

【ルーテシア】

「……自覚があるなら、無理に直そうとしなくてもいい？　で、でも……」

【ルーテシア】
「ん……そう、よ。私、貴方にはこうして、話す事が出来て……それはきっと、貴方が私に向き合ってくれたから……」

【ルーテシア】
「私……嬉しかったの。治療とは言え、私のためだけに薬やオイルを調合してくれたり、マッサージをしてもらったりするのが……」

【ルーテシア】
「初めて、無能な貴族の娘でも我儘（わがまま）な剣士でもない……ルーテシアという個人を見てもらえたような気がして……！」

【ルーテシア】
「うっ……うぅ、うわあああああっ……！！　ぐすっ、ひっく、ひっく……！」

【ルーテシア】
「うぅ……ふっ、ふぅうっ……！　わ、私……っ、ずっと、誰かに、見て欲しかった……！　私を見てくれる人と、話したかった、それだけで……！」

【ルーテシア】
「ぐすっ……ぐすっ、ぐすっ……ううっ、うぅ……うわああああっ……」

【ルーテシア】
「ううっ……うっ、うっ……ひぐっ、ひっく、ひっく……うわああっ……うっ、うっ……ふぇ、ふぇえっ……」

【ルーテシア】
「ふ、ぅっ……ゆっくり、息を、する……？　ん……分かったわ……ぐすっ……」

【ルーテシア】
「すーーーーっ……はあっ……すーーっ……はあっ……」

【ルーテシア】
「ん……うっ、うっ……ぐすっ、ぐすっ……すぅ……はぁ……すう、はあ……」

【ルーテシア】
「……ぐすっ、ぐすっ……ひっく、ひっく……」

【ルーテシア】
「……ん……ごめんなさい……見苦しいところを見せてしまって……」

【ルーテシア】

「え？　悪いと思わなくて、いい……？　でも、私……」

【ルーテシア】
「　……ええ、そうね。貴方の言う通りだわ。悪いと思い込むところから、直さなくちゃ……」

【ルーテシア】
「……ううん、違ったわね。直すじゃなくて……変える。これなら、どうかしら？」

【ルーテシア】
「ふふっ。じゃあ、そうするわ。自分を変えていけるよう、まずは……」

【ルーテシア】
「……ありがとう」

【ルーテシア】
「私、今まで、誰からも見てもらえない、愛されないと、そう思ってた……でも、貴方は違った……」

【ルーテシア】
「貴方のお陰で、どうやって話したらいいかも分かってきた気がする……本当に、ここに来てみて、良かった……」

【ルーテシア】

「ふふっ……もしかして、いつもこうやって心のケアをしているのかしら？　だとしたら、悪い人ね」

【ルーテシア】
「……え？　私だから……？　それって、どういう……」

【ルーテシア】
「……っ！」

【ルーテシア】
「ッ、きょ、今日はありがとう！　これ、お代！　ここに置いておくから……！」

【ルーテシア】
「な、何でもないわよっ！　雨も止んだようだし、帰るだけよ！　それじゃあ、また怪我をしたら来るわねっ！！」

【ルーテシア】
「っ……！　もう、もうっ……！　あんな事されたら、私……っ！」

【ルーテシア】
「……うぅ……！　せっかく、素直に話せるようになったと思ったのに……！！　う〜っ……これって……期待、しても……」

【ルーテシア】
「ダメ……今日はもう、帰って寝ましょう……」

■トラック５

【ルーテシア】
「おはよう。その……昨日はありがとう。色々と、不甲斐ないところを見せてしまったわね」

【ルーテシア】
「でも、貴方のお陰で今までずっと堪えていた事を吐き出せたわ。ふふっ、治療だけじゃなくてメンタルケアまで得意なんて、貴方、本当に優秀ね」

【ルーテシア】
「それで……その。今日は貴方に、お願いがあって来たんだけど」

【ルーテシア】
「ええ、お願い、よ。治療じゃなくてね」

【ルーテシア】
「……貴方、私とパーティーを組まない？」

【ルーテシア】
「ちょっと、そんなに驚かなくてもいいじゃない。むしろ今まで貴方が誰かに勧誘されなかったのが不思議なくらいよ？」

【ルーテシア】
「貴方は誰よりも人の事をよく見ている。それに治療の腕は抜群だし、治癒魔法だって使えるわ」

【ルーテシア】
「そして、何より……貴方になら、背中を任せられると私は思った」

【ルーテシア】
「本音を話す事が出来て、守りたいと思えるような人――それが、貴方なのよ」

【ルーテシア】
「も、もちろん……貴方はこの仕事が好きなのだろうし、担当している患者だっているんでしょう？　だから、難しいって事くらいは分かってる」

【ルーテシア】
「でも……私、思ったの。貴方と一緒に旅をしたい。これからも貴方に傷を治してもらって、貴方のために戦いたいって」

【ルーテシア】
「……どう、かしら？」

【ルーテシア】
「……」

【ルーテシア】
「……」

【ルーテシア】
「……っ、もう！　どれだけ悩むのよ！！」

【ルーテシア】
「治療をする時は迷ったりしないのに、こういう時は優柔不断なのね？」

【ルーテシア】
「昨日はあんなに優しく私の事を抱き締めてくれたくせに……」

【ルーテシア】
「あら？　なんだか顔が赤いみたいだけど……ヒーラーの不養生（ふようじょう）かしら？」

【ルーテシア】
「そんなに答えが出ないなら、そうね──」

【ルーテシア】
「ん…ちゅ、ぅっ…」

【ルーテシア】
「……これが私の気持ち。どう？　伝わったかしら？」

【ルーテシア】
「誰にも心を開けずにいた私がこんな事まで出来るようになったのは、貴方のお陰よ？　……私をこうした責任、取ってくれるでしょう？」

【ルーテシア】
「……ふふっ、いい返事！」

【ルーテシア】
「……大好きよ。これからもずっと、私だけを見ていてね」

【ルーテシア】
「ふふっ……それじゃあ──よろしくね、私のヒーラー！」